

岡山大学

埋蔵文化財調査研究センター報

第 13 号

1995年 3月 発行

岡山大学
埋蔵文化財調査研究センター

〒700
岡山市津島中3丁目1番1号
TEL・FAX(086)251-7290



骨は語る

遺跡からは土器や石器とともに、イノシシやシカなど様々な種類の動物の骨が出土することがあります。ほとんどは食料や道具として利用するために人間が持ち込んだものです。動物たちは、解体され食用に肉や髄を利用されたり、皮革や角・牙・骨等を衣服・道具・装身具に加工されたりと、様々な用途に活用されました。今日の発掘調査で発見されるのは大半が利用され尽くした後の廃棄物、いわば生ゴミなのです。また水辺や井戸から動物の頭骨だけが発見されることもあります。この場合、用途としては食糧・道具とは異なる面を考えさせられます。

骨は、どんな場所でも残っているわけではありません。遺跡が湿潤地に立地していたり、アルカリ性の強い土壌成分であることなどいろいろな条件が揃っていることが必要です。破損したり、加工された骨は元々残りにくいというのに、現在出土するものは実際の量のごく一部なのです。しかし、このような動物の骨からは、人々がどんなものを食べていたのか、水辺ではどんなまつりを行っていたのか等、古代の人々の生活を窺い知る手がかりを引き出すことができます。考古学ではこうした動物の骨を“動物遺存体”と呼び、例えば遺跡の中で自然死したものとは区別しています。

このわずかに残った骨から動物たちが語りかける世界をのぞいてみましょう。

岡大構内遺跡では、特に古代～中世の遺構に伴って、動物遺存体が発見されています。種類としてはウシ・ウマ・シカ・イヌ等の哺乳類やマダイ等魚類があります。なかでも興味深い資料をいくつか紹介してみましょう。

《食》

イヌは古代から現代に至るまで、人間にとって最も親しみのある動物と言えます。縄文時代には狩猟の良きパートナーであつたらしく、丁寧に埋葬された遺構も発見されています。一方、貝塚から解体され、バラバラになった状態で出土する骨もあり、食用犬の存在を示す資料も多くあります。

構内遺跡の例では鹿田遺跡の平安時代の河道中からイヌの椎骨が見つっています（写真1-左上）。鑑定の結果から解体された可能性が指摘されています。同じく鹿田遺跡から出土した写真1-右のウマの脛骨には上端に斧やナタのような金属性の道具による傷が認められます。この傷から上の部分は肉付きが良いところで、この肉を取るために解体されたものと考えられます。

少し時代は下りますが、中世の村落が丸ごと発掘されている広島県草戸千軒町遺跡の例を見てみましょう。この遺跡から出土する哺乳動物の骨のうち、ウシ・ウマを凌いで最も大きな割合を占めているのがイヌです。鑑定資料の実に70%以上だということです。出土状態をみると足の骨だけが数匹分まとまって出土した例や、骨に人為的な傷・焼けた痕跡の認められる例が数多く認められます。これらのことから草戸千軒の人々はかなり一般的に犬を食用としていたと考えられています。食用犬の例は全国の遺跡でも発見例が増えてきています。

肉食の習慣は、古代以降、仏教思想のひろがりとも結びついて、少なくとも表向きは禁忌とされてきました。そのため文献資料にも触れられることが少なかったと考えられます。しかし、発掘によって文献には記録されていない事実が明らかになってきています。



写真1 鹿田遺跡第3次調査出土の動物遺存体
左上 イヌ椎骨 左中 ウマ膝蓋骨
左下 ウマ後頭骨 右 ウマ脛骨



写真2 鹿田遺跡第3次調査出土の動物遺存体(2)
ニホンジカ 角

《道具》

写真2は、同じく鹿田遺跡の平安時代の河道から発見されました。2点ともニホンジカの角です。シカの角を利用した製品には縄文時代の釣針・銚や、古代～中世の刀装具などが知られています。上述の草戸千軒町遺跡では双六の駒も発見されています。

鹿田遺跡の資料にはどちらも両端部を人為的に折った跡が見られます。矢印の部分は端部を擦り切ったり、鋭い刃物で傷を付けた痕跡です。この資料が実際に何であったかはわかりませんが、何かを作る途中のもの、あるいは製品を作った後に不要になった材料と考えられます。

《まつり》



写真3 鹿田遺跡第5次調査井戸6
方形の木組み井戸側を持つ井戸の底から
出土したウシの頭骨(→部分)〈鎌倉時代〉

表紙写真のウシの頭骨は、鹿田遺跡の13世紀の井戸から発見されました。ここでは使わなくなった井戸を埋める際に、井戸の中央にウシの頭を上下逆さに置き、四隅に小皿4枚を並べていたことが、発掘結果からわかりました(写真3)。同じ場所からモモの種子も検出されています。骨の観察によると、このウシは別の場所で白骨化した個体から頭だけを取り外したものであるということです。思い浮かべてみると、少々薄気味悪い光景です。

もう一例紹介しましょう。写真4は、鹿田遺跡の11~12世紀頃の井戸から出土したウマの骨です。一個体分の骨が揃っていましたが、埋葬されたものではありません。解体し、一番上に頭骨を置いてあります。周囲から大量の炭化物も検出されています。上述のウシと同様、頭骨であることが意識されているようです。やはり井戸を埋める時に、ウマを置いたものと考えられます。全国各地で行われている発掘調査で、古代~近世にかけての井戸や池・水田などの水に

関係した遺構からウシ・ウマの骨が出土することが報告されています。民俗例では雨乞いのまつりのために牛馬を犠牲にする習俗があります。ここで紹介したウシ・ウマも、祭祀の一例を示すものなのでしょう。昨夏のような異常渇水時には、鹿田の人々も井戸に豊かな湧水をもたらしてくれるよう祈りを捧げていたのでしょう。

(岩崎 志保)

展示のお知らせ

私たちの足元、岡大キャンパスの地下に
眠っていた遺物を、実際に見てみませんか。

埋蔵文化財調査研究センターでは、構内遺跡で発見された様々な遺物を展示して、皆さんに公開しています。縄文時代から明治時代までの主な出土品を写真や解説を添えて紹介しています。

また本部事務局第一会議室にもミニ展示コーナーを設置しています。こちらでは最近の発掘調査の成果速報をテーマにした展示を行っています。

センター展示室は常時開室。どうぞ気軽にお越し下さい。

連絡先(086)251-7290



写真4 鹿田遺跡第1次調査井戸22
素掘り井戸内に置かれたウマの骨〈平安時代〉

◆◆◆最近の発掘調査から◆◆◆

津島キャンパスの下を流れる大溝

津島岡大遺跡第12次調査(図書館増築予定地)

1994年3月から行った発掘の中で、今回は山場である平安時代から縄文時代に遡る調査を報告しよう。

平安時代。幅10数m・深さ1m前後の大規模な溝が姿を現す。予想通りである。これまでも馬場や工学部等の地点で調査され、キャンパス内を東西に横断する条里の坪境溝。土地区割りの基準となる重要な溝である。

さらに掘り下げると弥生時代の溝群がその全容を見せ始める。大溝が1条、その脇に幅50cm程度の多数の溝。何度も繰り返し使用されている。大溝は幅10m前後・深さ1.5m程度の規模を誇る。平安時代の大溝に匹敵する規模である。底には多量の土器が、当時のままの姿で現れる。水量も豊富であったのであろう。多数の流木が堆積し、その中には巨大な材木や柱も含まれる(写真5)。さらに、精巧に作られた木製の農具や漆

を塗られた鎧の破片なども続々と発見された。水に浸かっていたため非常に残りがよい。当時の豊かな生活を彷彿させる瞬間である。大溝が使用されていた今から約1900年程前、これほどの大きな溝は構内遺跡では初めてである。周辺遺跡でも珍しい。今後の調査に期待がかかる。



写真5 弥生時代の溝の調査
溝の底から出土する木製品取り上げ風景



写真6 弥生時代の水田の調査
白線部分が畦畔
一辺2m程度の水田区画

この地域は、洪水を受け易かったのであろうか。次の調査面でも、水田の畦畔が砂にパックされて残っていた。砂を除去すると、小さく区画された水田がみごとによみがえってくる(写真6)。弥生時代前期、稲作導入初期の水田である。地形に沿って作られている。自然をうまく利用しているのである。

さらに、遡ると縄文時代にたどりつく。約3000年位前であろうか。焼け土の塊が各所で見つかる。炉の跡である。火を盛んに使っているようだ。残念ながらそれ以上の具体的なことは解らない。謎である。

縄文時代から現在まで、人々が様々な形で残した痕跡がまた新たな事実を示してくれた。そして、1994年11月の発掘調査の終了は、同時に、謎を解きあかす整理作業の開始でもある。

(山本 悦世)